

総合的な学習 の時間



I はじめに

自立・協働・創造を今後の教育理念として提起した第2期教育振興基本計画では、その前文において、「持続可能な社会を実現するための一律の正解は存在しない。」とし、社会の全構成員が当事者として課題探究に取り組むように求めている。これからの知識基盤社会やグローバル社会においては、課題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力などの実社会や実生活で活用できる能力が不可欠であり、そのために総合的な学習の時間における探究的な学習がより重要とされている。本校では総合的な学習の時間を「学びの柱」として位置づけている。探究的な学習の原動力として生徒自らが「問い」を生み、他者との関わりの中で自らの学びを振り返り、これからの生き方を展望できる「学びの主体者」となる生徒を育ていきたい。

II 本校研究と総合的な学習の時間との関わり

1 最終年次研究実践内容

(1) 生徒自らが「問い」を生む手だて

総合的な学習の時間において主体的で粘り強い問題解決や探究的な活動を生み出すには、その原動力として、生徒自らが「問い」を生むことが大切である。そのための手だてとして以下の6点を設定した。

- A 探究的な活動の課題設定において、生徒のもつ思い込みや自分なりの考え（素朴概念）と具体的事象とのずれに気付いたり、新たな視点を発見したりすることから「問い」を生む（実践例1）
- B ゲストティーチャーによる講話や専門家との交流から、自分の理想の姿と現実とを対比し、自分をより成長させたい、社会をよりよくしたいという強い願いを抱くことから「問い」を生む（実践例2、3）
- C 情報を収集・活用する前の予想と、収集・活用後の結果との違いから「問い」を生む（実践例2）
- D イメージマップやブレインストーミングなどを行い、拡散的に思考を巡らせていくことから「問い」を生む（実践例2、3）
- E ロールプレイなどの体験的な活動をしたり、KJ法などを用いて考えを類型化したり、序列化して整理していくことで「問い」を生む（実践例1）
- F 単元を貫くねらい・目標が生徒の学びに機能し、常に意識できることで「問い」を生む

※本校では各学年の学習内容を、1つの単元として学習を進めている。

(2) 「問う」ことの価値の実感をもたらす手だて

「問う」たことと「問い」が解決されたこととのつながりについて意識できるようにすること

<過去を振り返る視点>

○各小単元において、他者と協同的に学ぶことや、相互に評価する学習活動を展開する

「問う」と「問い」の連関を図り、自分自身の考えを整理したり、分類したり、構造的に捉えたりするために、「問い」を解決する過程において、他者と協同的に学ぶことや、相互に評価を行う学習活動を展開する。総合的な学習の時間における「問い」は個で探究する場面も存在する。しかし、よりよい解決方法を検討したり、より適切な内容を導いたりするときには、多角的に物事を捉えたり、批判的に検討することも必要である。自分にはない視点をもとに議論したり、他者の考えを取り入れたりすることで、自分の考えに自信をもち、深めることができる。他者との関わりによって得られた新たな視点は「問い」の解決につながり、「問う」ことによって、その価値を実感することができる。例えば、第2学年では仲間だけではなく、異文化をもつ人々と交流したり、専門家や地域の方々にインタビューを行ったり、自分の「問い」を「問う」活動を通して、今までになかった価値観に触れ、自分の考えを広げることができた。第1学年ではロールプレイなどの活動に評価者をつくる、第3学年においては「問い」の解決方法や結論に対して相互に評価を行うことで、どの点に再検討が必要なのか、どのような点を活かしていけばよいのかを知ることができた。

「問う」ことによって「問い」が解決されたことと次の学びや未来の自分とのつながりについて意識できるようにすること
＜未来を展望する視点＞

○各小単元において、自分たちの活動を振り返る活動や、学びを発信する学習活動を展開する

「問う」と「問い」の連関を図り、次の学びの展望をもったり、新たな学びへの意欲を高めたりするために、自己の学びを適切に振り返り、他者に伝える学習活動を展開する。自己の学びを振り返ることは、「問い」を解決した過程を明らかにすることになる。その過程を他者に伝えることで学びの評価へとつながり、これからの見通しをもつことができる。例えば第3学年では、社会の諸問題から一人一人が課題を設定し、フィールドワークなどを通して調査を行いながら、社会の一員として自分に何ができるかを考え、結論を出す。その成果を「ブルーム発表会」で第1、2学年の生徒や保護者、地域の方々に発信する。自分の「問い」をどのような過程を通して解決することができたのかを振り返り、他者に表現し、意見を交流することで、次の学びに向けての展望を描くことができる。

＜過去を振り返る視点＞＜未来を展望する視点＞の両方に機能する手だて

○自らの「問い」を解決する過程を意識することができる単元構成の工夫

単元（小単元）を通して、「問う」ことを通して自らの「問い」がどれくらい解決に近づいているか、自分の考えがどれくらい広がっているのか、「問い」を解決するために、何が足りなくて、これからどのような活動を行う必要があるのかを生徒自身が意識できるような単元構成の工夫を行う。第3学年においては最初の授業で、1年間の単元計画を示している。1年間を通してどのように自分の「問い」を解決していけばよいのか、どのように他者と関わり情報収集を行うのか、解決した「問い」をどのように発信していくのかを意識することができる。第2学年においては単元を通してイメージマップを活用している。仲間が描いたものと比較したり、同じ題材で複数回イメージマップを作成したりすることを通して、自分の考えを整理し、構造的に捉えることで、自己の考えの広がりや認識を認識することができる。また、全学年を通して、授業の最後に意味づけを行っている。この際には「新たに気が付いたこと・残された課題・継続して取り組んでいくこと」という視点で学びを振り返っている。これにより、今後の学びへの展望が明確となり、新たな学びに自らを促していくことができると考える。

Ⅲ 参考文献

- 小島宏 『総合的な学習の創造』 教育出版、1997年
文部科学省 『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』 2011年
文部科学省 『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間』 2008年

IV 実践例

<実践例1・第1学年「ベース」>

1 「ベース」の目標

よりよい人間関係や情報の適切な活用について考え、判断していく探究的な学びを通して、学級、学年の仲間や異年齢集団と関わり、協同して課題を解決しようとする態度を育むことをねらいとする。また、人間関係形成力や、情報活用能力など、社会で生きていくために必要となる資質や能力の「基礎」を身に付け、自己の理想の姿について考えることができるようにする。

2 「ベース」で育てたい資質や能力及び態度

○目的に応じて方法を選択しながら、情報の収集、整理、分析をし、それらを効果的に発信する能力

【学習方法に関すること】

○目標を明確にし、課題の解決に向けて計画的に行動したり、学んだことをもとに自らの生活の在り方を見直したりして、日常的に実践しようとする態度

【自分自身に関すること】

○自分とは異なる意見や他者の考えを受け入れ尊重し、互いの長を生かしながら協同して課題を解決する能力

【他者や社会とのかかわりに関すること】

3 実際の授業

題材：「伝える」～自分の意見を他者に伝えることの必要性和適切な表現法

本時の目標：互いの気持ちを分かり合うために、どのような自己表現が適切かを理解し、自らの生活の在り方を見直すことができる。

(1) 生徒自らが「問い」を生む手だて

本題材は、「伝える」をテーマに5時間を3回の授業で構成した。題材全体を通して「問い」を生み、「問う」ことの価値を実感する学び合いを行うことで、自分の意見を他者に伝えることの必要性和適切な表現法について理解することを目標としている。

各授業の導入において、前時の学習活動で「問う」ことによって解決した内容を活用する場面を設定する。しかし、状況が違くと新たな工夫が必要であることに気付く。前時までの学びに新たな視点を与えることから「問い」を生むことを、「問う」と「問い」の連関を強める手だてとした。

	伝える①～正確に伝える	伝える②～自分の考えを伝える	伝える③～適切な自己表現
目標	<ul style="list-style-type: none"> 情報を相手にわかりやすく正確に伝えるためには、伝える順番やその内容を整理し伝えることが大切であることを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを伝えるためには、情報を正確に伝えるだけではうまくいかないことがあることに気付き、自分の考えを上手に表現することの必要性和その方法を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 互いの気持ちを分かり合うために、どのような自己表現が適切かを理解し、自らの生活の在り方を見直すことができる。
生徒自らが「問い」を生む手だて	<p>簡単な絵を言葉だけの説明で描く。簡単にできる思ったことができなかった体験から「伝え方にもポイントがあるのではないだろうか」という「問い」を生む。</p>	<p>感情表現の必要性に気付かせるための教師によるロールプレイ「テレビショッピング」により、「自分の考えをどのように表現すればよいか」という「問い」を生む。</p>	<p>伝え方の違いに気付かせるための教師によるロールプレイ「CD」により、「自分の思いや考えを適切に伝えるにはどんなことが大切だろうか」という「問い」を生む。</p>
生徒の気付き	<ul style="list-style-type: none"> 結論から先に話す 短い言葉で表現する 時系列を大切にする <p>など</p>	<ul style="list-style-type: none"> 身振り手振りをつける 間をとる 抑揚や強弱をつける <p>など</p>	<ul style="list-style-type: none"> 相手の気持ちを考えながらもしっかりと自分の思いや考えを伝える <p>など</p>

(2) 「問う」ことの価値の実感をもたらす手だて

生徒が「問う」ことの価値を実感する場面を題材のまとめにあたる3回目の授業に設定した。手だての1つ目として、各題材において他者と協同的に学ぶことや、相互に評価する学習活動を展開した<過去を振り返る視点>。具体的には、3人グループで「強気型」・「弱気型」・「理想型」の3つの伝え方をしたと

<実践例2・第2学年「トランク」>

1 「トランク」の目標

多様な他者・文化を理解しようとする探究的な学びを通して、ものの見方や考え方を広げ、文化の違いや多様性、異なる文化をもつ相手を受容・尊重し、共に生きようとする意欲や態度を育て、自己の在り方を見つめ直すことができる。

2 「トランク」で育てたい資質や能力及び態度

○情報収集の方法を理解し、目的に応じて整理・分析し、それらを課題解決に向けて活用する能力

【学習方法に関すること】

○自他のもつ文化の特徴に気づき、自分の課題を明確にする能力

【自分自身に関すること】

○異なる文化をもつ相手とお互いのよさを活かしながら、協同して課題を解決しようとする態度

【他者や社会とのかかわりに関すること】

3 実際の授業

小単元：文化の世界を広げよう（13時間）

(1) 生徒自らが「問い」を生む手だて

生徒にとって「文化」という言葉はあまりにも曖昧であり、「異文化をもつ人との交流」は想像ができないため、最初の1時間のみで1年間の学習内容や目標を自分ごととすることは非常に難しい。そこで、「文化とは何か」という「問い」を軸として、小単元全体を通して「問う」ことの価値を実感する学び合いを行うことで、トランクで目指す自己の理想の姿を設定することをねらった。表中の★で示している3つの体験についてそれぞれの活動独自の「問い」を生みながらも、イメージマップを活用して「文化」に対する自分の考えを整理していくことで「文化とは何か」という「問い」を生む。また、それぞれの体験の前後には課題の設定と振り返りを必ず行い、生徒自身が新たな「問い」を自覚しながら学習を進められるようにした。

時期	タイトル	時数	・学習活動	・生徒の思考 *「問い」
4④	オリエンテーション 課題の設定	2	・ベースの学びを振り返る。 ・「文化」のイメージマップ①を作成する。	*文化とは何か。あいまいでよくわからない言葉だ。
5③	「ちがいのちがいがい」★体験 情報の収集	2	・「ちがいのちがいがい」の活動を通して、「文化の違い」に対する自他の考えを探る。	・お互いに尊重し合う事が大切だ。 *なぜ違いや争いが生まれるのだろうか。
5④	「ちがいのちがいがい」を振り返る 整理・分析～まとめ・表現	1	・違いという視点から、「文化」を考える。 ・「文化」のイメージマップ②を作成する。	・文化には、物質的なもの他、歴史、考え方、習慣、制度なども含まれる。
5④	おたる文化学習に向けて 課題の設定	1	・札幌と小樽の街のもつ相違点や共通点について、イメージを広げる。	*建物や食べ物など、身近なところにも文化の違いがあるのではないかな。
5⑤	宿泊学習★体験 情報の収集	—	・宿泊学習（特におたる文化学習）を通して、小樽の歴史・文化・自然に触れる。	・札幌と街並みや発展の仕方、暮らし方が全然違う。
5⑤	おたる文化学習を振り返る 整理・分析～まとめ・表現	1	・自分の感じた小樽の歴史や文化についてまとめ、小樽の特長を整理する。	・小樽は歴史を大切にしている街、運河で栄えた街だ。
6②	交流会に向けて 課題の設定	1	・交流会に向け、準備を行う。	*うまくコミュニケーションがとれるのか。
6②	マサチューセッツ大学生との交流会★体験 情報の収集	2	・異文化をもつ大学生と、お互いの文化について交流を行う。	・ジェスチャーなどで伝えようとする事、相手の気持ちを考えることが大切だ。
6②	交流会を振り返る 整理・分析～まとめ・表現	1	・交流会を振り返り、異文化をもつ方との交流における成果や課題を整理する。	・1年生で学んだ人間関係形成力を活かすことができ、よい交流になった。
6③	「トランク」の学習を通して目指す姿の設定 整理・分析～まとめ・表現	2	・「文化」のイメージマップ③を作成する。 ・1年間の学習活動の内容を知り、これまでの体験をもとに目指す姿を設定する。	・どんな人とも積極的にコミュニケーションがとれるようになりたい。 *日本や札幌の文化とは何か。

(2) 「問う」ことの価値の実感をもたらす手だて

本小単元では、各体験に対する「問い」について、仲間やボランティアガイドの方、異文化をもつ大学生に繰り返し「問う」こと、また「文化」を軸に「問い」を束ねることで、これからの学習の展望をもつ構成とした<過去を振り返る視点><未来を展望する視点>。体験の場面では、自らの「問い」を明確にしたう

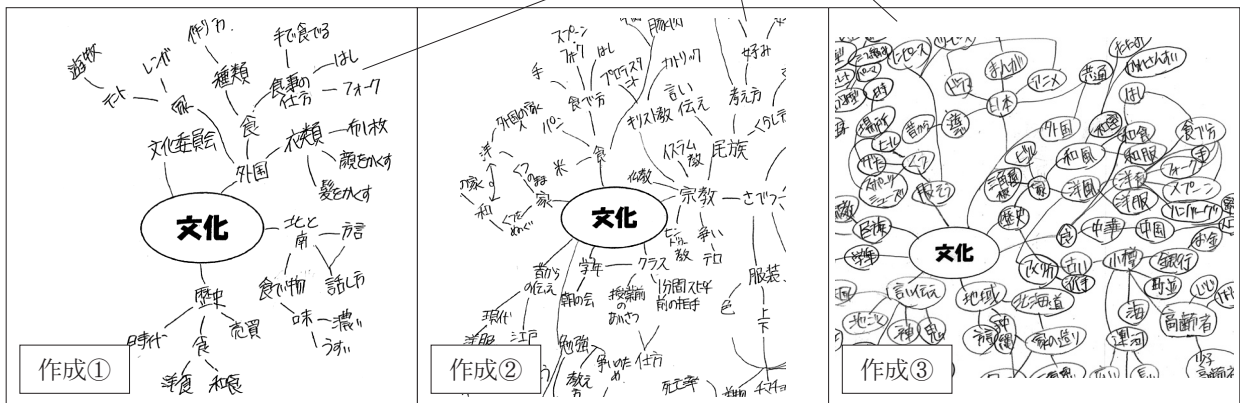
えて十分に時間をかけて「問う」ことができるよう、展開を工夫した。また、生徒が自らの「問い」を解決する過程をさらに意識することができるように、イメージマップと振り返りシートを活用した。文化を中心にしたイメージマップは、仲間と見比べることで自分にはなかった考えを取り入れることができる。また、複数回作成したものを比較することで自己の考えの広がりを感じ、「文化とは何か」という「問い」が解決の方向に向かっていることを意識することができる。毎時間の振り返りに活用するシートには、成果、課題、次回に向けての3つの視点で整理して振り返りを記述することにより、前時の「問い」が本時ではどのように解決されたのか振り返るとともに、本時から次時へと展望がもてるように工夫した。

(3) 実践を終えて

小単元を貫く「文化」とは何かという「問い」が、体験と振り返りにより解決に向かっていった。イメージマップにおいては、1回目から3回目の作成にかけて多くの生徒がキーワードやつながりを増やしていた。下の生徒は、作成①では文化を外国や歴史と捉えていたが、作成②で文化から連想する語が増え、作成③ではより身近な生活と結びつけ、異なるキーワードから派生した物同士の関連も見つけられるようになった。イメージマップを見比べ、なぜそのような変化が起こったのか、何がきっかけだったのかを振り返ることで、3つの体験を通して「問う」たことの価値を実感することができたといえる。

★イメージマップを書く事で、自分からどのくらい文化について学んだか1回目に
見えて、OTAvipが学んだ事や、また、もう一セツリ大学の文化を学んだ事か
きかされてる位、自分のためになんか覚えました。又、上りのこと
についてあまりわかっていけなかったのに、イメージマップを書く事で通して
トラソってこの文化と自分とが繋がって来た。前は文化は外国とか
いうイメージだけであまりつながりかかありませんでした。でも今
文化と繋がれたりこうという事がたくさんわかっていけるようになった。学
びが深まったと思います。

振り返りシートより



また、イメージマップを作成したことにより、「広がったが、どこからどこまでを文化とすればよいのか」「特に身近な生活について知りたい」と、新たな「問い」が生まれる生徒も多かった。これらの「問い」は、次の小単元の学びへの原動力となることが考えられる。

目指す姿の設定では、体験での成果や課題が十分に活かされていた。右は交流の場面での自身の課題に基づき設定したものだが、実際に体験し「できない」と感じたからこそ、目指す姿を設定できたと考えられる。また、「自分の文化がわからないから知りたい」「日常生活でも相手のことを考えたい」など、現在の自分の課題や身に付けた力を見つめながら、目指す姿を設定する姿がみられた。これまでの単元構成から未来への展望をもつことができると言えるだろう。今後は、本小単元のまとめとして設定した「目指す姿」を目標とし、各小単元で振り返り、更新しながら学習を進めていく。生徒の「問い」を原動力としながら、学級や学年の仲間のみならず多くの方に「問う」ことを大切に、学習活動をすすめてい。

目指す姿の記述

ロトランクで、自分はこんな姿を目指したい

一ツセツリ大学の時の課題だった。自信がない→堂々としていない
→相手を困らせるという流れを無くすために堂々とハキハキ
している事によって伝わりやすさも改善されると思う。
だから私は文化について学ぶと共に話し方も堂々としている姿を目指す

<実践例3 第3学年「ブルーム」>

1 「ブルーム」の目標

横断的・総合的な学習や探究的な学びを通して、社会における諸問題から自らの課題を設定し、よりよく問題を解決していく能力を身に付けるとともに、多様な他者と積極的に関わり、社会の一員として協同的に取り組む態度を育て、持続可能な社会の構築に向けた意識を育み、自己の生き方を考えることができる。

2 「ブルーム」で育てたい資質や能力及び態度

- 社会の諸問題から課題を設定し、他者と関わりながら適切な方法で情報を集め、それを論理的・客観的に整理・分析する能力 【学習方法に関すること】
- 考察に基づき、自分には何ができるのかを考え、当事者意識をもちながら持続可能な社会の構築に向けて行動しようとする態度 【自分自身に関すること】
- 様々な人々の立場や、社会的背景を理解し、課題の解決に向けて社会活動に参画しようとする態度 【他者や社会とのかかわりに関すること】

3 実際の授業

小単元：社会の諸問題を捉え、課題を設定しよう

本時の目標：仲間との評価活動を通して、これまでの活動を通して考えた課題が、ブルームの課題として探究する価値のある課題になっているかを考え、自分の課題を決定することができる。

(1) 生徒自らが「問い」を生む手だて

「社会の諸問題を解決するのに、自分たちにできることは何だろうか」という「問い」を生徒自らが生むために、小単元全体を通して、生徒が社会の諸問題を自分ごととして捉えられるよう、東日本大震災ボランティアを行っている大学生との交流を行ったり、イメージマップを用いて課題となるキーワードを考えたりするなど体験的な活動を行った。また、本時までには、課題を検証する視点を7つ設けて、自分自身で検証を行い課題を1つに絞り込んだ。この活動を通して「この課題で本当によいのだろうか」「ブルームの課題として足りない視点はどこだろうか」「よりよい課題にするためにはどうしたらよいのだろうか」などの「問い」が生まれ、自己評価だけではなく、他者からの意見や評価を強く求めるようになった。

【課題を検証する7つの視点】

- ①調べてすぐわかるものではないか
- ②課題が広すぎないか。自分の能力に合うか
- ③自分が興味をもっているか
- ④課題の解決が社会の役に立つのか
- ⑤自分ごとの課題になっているか
- ⑥課題を選んだ理由・現在の考えを書けるか
- ⑦調べたいことが複数挙げられるか

(2) 「問う」ことの価値の実感をもたらす手だて

本時では個々が立てた課題がブルームの課題として適しているかを互いに交流、評価する活動を行う。その際に、それぞれの課題を漠然と評価し合うのではなく、右のワークシートを活用して、7つの視点に対する自己評価とお互いの評価を比較しながら「問う」活動を行う。このことで、同じ視点に対する4人の評価が明確となり、異なる評価となった視点を中心にどの視点がよいのか、どの視点に再検討が必要なのか、ブルームの課

自己評価

課題検証の視点	評価
①調べるだけで結論ができるものではないか	○
②自分の能力にあうか (課題が広すぎたり、狭すぎないか)	△
③興味をもっているかどうか	○
④社会とのかかわりがあるか (課題の解決が社会の役に立つか)	○
⑤自分ごとの課題になっているか	○
⑥課題を選んだ理由・考えが明確か	○
⑦調べたいことが複数あるか	○

仲間の評価

課題検証の視点	評価
①調べるだけで結論ができるものではないか	○
②自分の能力にあうか (課題が広すぎたり、狭すぎないか)	○
③興味をもっているかどうか	○
④社会とのかかわりがあるか (課題の解決が社会の役に立つか)	△
⑤自分ごとの課題になっているか	○
⑥課題を選んだ理由・考えが明確か	○
⑦調べたいことが複数あるか	○

7つの視点を比較する

自分の主張点・仲間と相談したいこと

相談したいこと
→ 文芸部で活動している
課題の書き方について
「経験者」ならではの社会的な見聞を
多謝したいこと
→ 経験者としての課題の整理

良い視点だと思うこと

社会への関わり(ボランティア)の中から、課題を捉えている。

良い視点だと思うこと

身近な所から自分事にし、調べる書き方から試しているのが
いいですね。

良い視点だと思うこと

自分ごととして捉えているのが
いいですね。

仲間からの良い点・アドバイス

題として何が足りないのかなど、「問う」視点を明らかにすることができる〈過去を振り返る視点〉。課題設定後には、これまでの取組を振り返る活動を行う。ワークシートにはこれから1年間のブルームの見通しが記されており、小単元が終わるごとに、それまでの活動を振り返り、今後の活動に展望をもつことができるようにしている。今までのどのような活動が課題設定につながったのか、これからのブルームで、どのように探究を進めていきたいのか、よりよい課題にするためには何が大切なのかを考えることで、「問う」ことによって「問い」が解決されたことと次の学びや未来の自分とのつながりについて意識できる〈未来を展望する視点〉。

(3) 実践を終えて

7つの視点に対する自己評価と仲間の評価を比較することによって、どの視点において、自分と仲間の考えが異なるのか明らかになり、「問う」活動が活性化された。自分の評価と仲間の評価が異なる場合には、なぜ、このように考えたのかを互いに「問う」ことで、異なる価値観にふれ、自分の考えを広げることができた。また、自己評価と同じ評価の視点には自信を深める姿があった。このように、どの視点を改善していけばよいのか、どの視点がブルームの課題として価値があるのか、これからどのように探究を進めていけばよいのかを明らかにできたことが〈過去を振り返る視点〉として機能したと考える。その後、仲間との評価活動でもらった意見を参考に自分の課題を再検討し、課題の決定を行った。生徒の中には、悩んでいた部分に意見をもらって方向性が定まり、それまでの課題を変えた生徒もいた。最後は、15時間かけて取り組んできた課題設定までの振り返りを行った。ある生徒の振り返りには「仲間との交流を通してすっかりした自分があった。それは仲間の考えを聞きながら、自分の課題や考えを客観的に見ることができたからだ」と書かれていた。このように、「問い」を解決するのに「問う」たことがどのように機能したのかを実感し、次の学びへの展望を描くことができたと考える。

達成できたこと・残された課題・継続して取り組んでいくこと
課題を設定するうえでまず「社会の諸問題」には「どのようなものがあるのか」を考えたが想像以上にたくさんの問題があること、また自分のできることの中にも気づくことがありました。自分が一番興味のある「睡眠」についての課題にしましたが、課題設定は非常に難しく悩みました。先生を比べた視点（自分とは違う角度からの視点）を知ることが今でも自分自身で考えつづけること、知りたことも知りたこと、悩みを解消されました。自分だけでなく様々な人の視点も知り取り入れたいです。

【生徒の振り返りのワークシート】

V 今次研究から見えてきたこと

総合的な学習の時間において探究的な学習を展開するためには、生徒自らが「問い」を生むことが大切であり、3年間の研究の成果として、有効な手だてとすることができた。また、単元を貫く「問い」の設定が、生徒の学びに機能していることも必要であることが分かった。さらに、「問う」ことによって「問い」が解決したことを通して、自分の考えを広げたり、「問う」がどのように「問い」の解決に機能しているのかを理解することが、自己を客観的に捉えたり、自らを成長に促すことにつながる分かった。特に第3学年のブルームにおいては、他者との関わりや「問う」ことを通して、最初に設定した「問い」や研究方法、自らが考えた結論を評価したり、振り返る機会を設けたりすることで、自らの「問い」を解決することが社会の役に立つのか、この方法で本当に解決にまで結びつくのかを常に考えることができた。これにより次の学びへの展望を具体的に描くことができ、他者との関わりの中で自分自身を客観的に捉えたり、自己の成長に向かうことができる「学びの主体者」となる生徒に近づくことができたと考える。

総合的な学習の時間における「問い」はさまざまであり、解決に向かっていても結論を導き出すことができないこともある。また、この結論でよいのかを判断することが難しいことも多い。そこで、自分の学びの過程を生徒自身が振り返り、自らの成長を自己評価することが大切であり、教師が学びや成長の足跡に気付かせ手だてが一層必要であると考えられる。